論文審査の結果の要旨

氏名：水　谷　　卓
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：Left Gastric Vein Width Is an Important Risk Factor for Exacerbation of Esophageal Varices Post Balloon-Occluded Retrograde Transvenous Obliteration for Gastric Varices in Cirrhotic Patients
（左胃静脈径は肝硬変患者の胃静脈瘤に対するバルーン閉塞下逆行性経静脈的閉塞術後の食道静脈瘤増悪の重要なリスクファクターである）

審査委員：（主 査）　教授　髙　山　忠　輝

（副 査）　教授　山　下　裕　玄　　教授　松　本　直　也

教授　岡　田　真　広

目的：門脈圧亢進症に起因する胃静脈瘤は、未治療の場合、5 年間の累積出血率は 44%であり、出血による生存率も低下が知られている。胃静脈瘤は、左胃静脈（LGV）が流出路であり、バルーン閉塞下逆行性経静脈的閉塞術（BRTO）が施行される。遠肝位側副血行である LGV の血管径と食道静脈瘤の関連性があることは知られている。そこで、水谷氏は、BTRO 後の症例で LGV 径とその後の食道静脈瘤を造影 CT で評価し、治療後の食道静脈瘤の進展に関して検討した。

対象と方法：2008 年から 2018 年に孤立性胃静脈瘤に対して BRTO を施行した肝硬変患者 91 例を対象とし、そのうち造影 CT 検査が施行された 50 例を解析対象とした。食道静脈瘤の経過観察には造影 CT を用いた。LGV が主たる流入血管となる LGV 径 3.55mm 以上のものを LGV 群、それ以外を非 LGV 群とした。BRTO 後の食道静脈瘤の評価は、日本内視鏡外科学会のガイドラインに従い、form のグレードが 1 段階以上の増悪を認めた症例を増悪とし、増悪を認めない症例を非増悪として判定した。そして、LGV 群と非 LGV 群の BRTO 後の食道静脈瘤の増悪率を比較検討した。

結果：LGV 群 37 例、非 LGV 群 13 例で、4 年間の経過で検討した。観察期間中、死亡 10 例、離脱 29 例、4 年以上の長期観察例 11 例であった。
食道静脈瘤の増悪率は、1 年から 4 年後の年次変化は、LGV 群で、それぞれ 48%、63%、73%、74%であった。非 LGV 群では、18%、37%、37%、37%であった。
また、LGV 群で、累積増悪率では、食道静脈瘤が有意に悪化していた。（Gray test:$P<0.03$）

本研究では、孤立性胃静脈瘤における LGV 径が BRTO 後の食道静脈瘤の進展に関連し、増悪因子であることを示した。造影 CT を用いた食道静脈瘤の評価方法としての課題を残しつつも、新規性があり、学術的・臨床的に価値の高い研究である。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるのに値するものと認める。

以　上

令和 4 年 10 月 12 日